

農芸化学の揺りかごとを出て

浅見忠男

東京大学大学院農学生命科学研究科

現生人類であるホモサピエンスの誕生から広がりについては多様な説が唱えられているが、人類の揺りかごとと呼ばれる東アフリカでおそらく15万年年前に突然変異で誕生したわれわれの祖先がアフリカを出て生存範囲を広げてきたとの説が有力である。しかしそれ以前の数百万年間にわたり、同様に東アフリカで生まれた人類（原人、ネアンデルタール人など）も世界に広がっていたことが世界各地で見いだされる遺骨から確認されている。しかし、現在では彼らを見ることはできない。現生人類祖先に関係する多くの類人猿、旧人類はなぜ死に絶える運命を受け入れざるをえなかったのだろうか。一方、一握りの数の個体から始まった現生人類種であるホモサピエンスが何度か遭遇したであろう絶滅の危機を乗り越え、生存への柔軟性を発揮し、ほかの人類種のみならずほかの生物種を圧倒し、現在のような繁栄を遂げることができたのはなぜであろうか。特に人類のなかで最もわれわれに近く、かつ年代的に現生人類と共存していたことが確認されているネアンデルタール人は、現生人類の生存領域の拡大に伴い姿を消したことが知られている。現生人類のDNA中にはネアンデルタール人の遺伝子が保存されているにもかかわらず（特に日本人はその保存率が高いことも最近になって報告されている）。この理由については具体的な証拠に基づいたいろいろな学説が提出されており興味尽きない。

現生人類がこのような広がりを見せた理由の一つとして、複雑な情報交換を可能にした「言語」能力の獲得に伴う情報通信網を発達させることで、多数が組織的に活動できるようになったためとの説がある。しかし、われわれだけでなく人間以外の生物も情報通信網をもち、さらにはほかの人類は言語さえもっていたと考えられている。ユヴェ

ル・ノア・ハラリは「ホモサピエンス全史」のなかで、われわれの繁栄の理由を虚構による協力によるものであるとし、膨大な数の見知らぬ人同士も、たとえば共通の神話を信じることによって協力できると述べている。信じ、伝承することができる新しい物語を紡ぎ出す能力をもったホモサピエンスが新しい土地に到着するたびに、ネアンデルタール人のみならず、地球上の各地に生存していた先住の人々は滅び去った。

もし、新しい能力をもった新しい人々が誕生したときに、われわれは彼らを歓迎できるのであろうか？ いや、彼らはわれわれを仲間と認めてくれるのであろうか。これは人々が認めたがらないだけで、現時点でも起きている現象ではないだろうか。ネアンデルタール人の滅びも50年や100年のレベルではなく数万年のレベルで起きており、彼らは数万年後の絶滅を想像できていなかったと思われる。

さて、農芸化学である。日本独自の学問分野であり、人類が東アフリカの揺りかごとから誕生したように、日本における食品製造や農業生産を基盤として生まれ育ってきた。現在ではその範囲を大きく広げているが、すでに新しい学問に生存の場所を狭められてはいないだろうか。幸いにAIにより将来なくなる職業リストの中には教育者や研究者は含まれていない。しかしながら、研究教育環境全般においてもすべての情報処理を迅速に行うことが求められている状況であり、これができないと実験も、論文発表も、教育も滞りつつある。

新しい人々、新しい能力を呼び込み共通の新しい農芸化学神話をつくり出すことが望まれている。

Copyright © 2017 公益社団法人日本農芸化学会
DOI: 10.1271/kagakutoseibutsu.55.513



プロフィール



浅見 忠男 (Tadao ASAMI)

＜略歴＞1982年東京大学農学部農芸化学科卒業／1987年同大学大学院農学系研究科農芸化学専攻博士課程修了／1987年日本特殊農薬製造(株)入社／1991年理化学研究所入所／2006年東京大学大学院農学生命科学研究科教授，現在に至る＜研究テーマと抱負＞活性化化合物の創製とその作用機構の解明を通して生物活性物質で世界の幸福に貢献したい＜趣味＞球技（卓球，バドミントン，テニス，ソフトボール等ボールが小さい方），音楽と運動の調和